

# 音韻学入門 - 中古音篇 -

1. 音韻学とは何か		§ 26 四声と等位	(p.14)
§ 1 言語は変化する	(p.1)	§ 27 一等韻～四等韻	(p.14)
§ 2 音韻変化	(p.1)	§ 28 練習 [用語の確認]	(p.15)
§ 3 音韻学	(p.1)	§ 29 三十六字母	(p.15)
§ 4 時代区分	(p.1)	§ 30 唇音	(p.15)
§ 5 対象	(p.2)	§ 31 練習	(p.17)
§ 6 方法	(p.2)	§ 32 舌音	(p.17)
§ 7 比較言語学の方法	(p.3)	§ 33 練習	(p.18)
§ 8 入門段階での目標	(p.3)	§ 34 牙音	(p.18)
		§ 35 練習	(p.19)
2. 資料の解説		§ 36 復習と補足	(p.19)
§ 9 『広韻』	(p.3)	§ 37 練習	(p.20)
§ 10 『韻鏡』	(p.4)	§ 38 齒音	(p.21)
§ 11 『漢語方音字彙』	(p.4)	§ 39 齒頭音	(p.21)
		§ 40 練習	(p.22)
3. 『広韻』の構造		§ 41 正齒音	(p.22)
§ 12 四声で五卷に分かれる	(p.4)	§ 42 練習	(p.22)
§ 13 韻目	(p.6)	§ 43 喉音	(p.23)
§ 14 小韻	(p.6)	§ 44 練習	(p.23)
§ 15 反切	(p.6)	§ 45 来母と日母	(p.24)
§ 16 練習 [東韻の反切]	(p.6)	§ 46 練習	(p.24)
§ 17 韻と韻母	(p.7)	§ 47 声母のまとめ	(p.24)
§ 18 練習 [反切系連法]	(p.8)	§ 48 等位と拗介音	(p.25)
§ 19 練習 [反切系連法]	(p.8)	§ 49 十六撰	(p.26)
§ 20 練習 [平声の韻目]	(p.8)	§ 50 練習	(p.26)
§ 21 切韻残卷	(p.9)	§ 51 外転系の韻の配置	(p.26)
§ 22 四声相配	(p.13)	§ 52 内転系の韻の配置	(p.28)
§ 23 練習 [まとめ]	(p.13)	§ 53 韻母の音価表	(p.28)
		§ 54 練習	(p.30)
4. 『韻鏡』の構造		5. 参考文献	(p.30)
§ 24 転図	(p.13)		
§ 25 五音	(p.14)		

## 1. 音韻学とは何か

### §1 言語は変化する

全ての言語は時と共に変化する。中国語も例外ではない。語彙、音声、文法の各方面にわたって様々な変遷を経てきたのである。音声面での変化について、具体的な例をひとつ見てみよう。現代の中国語(北京音を標準とする)では「講」という漢字を *jiang* [tɕiaŋ] と読んでいる。しかし、このような発音が広まったのは二百年かせいぜい三百年前(すなわち清代)からのことであって、それ以前には(少なくとも標準音は)今とは違った発音で読まれていた。元明代には [kiaŋ] であったし、唐末五代の頃には [kaŋ] であった。つまり、ごく大ざっぱに言えば、「講」字の唐末以降現代までの標準的な発音は *kaŋ* > *kiaŋ* > *tɕiaŋ* という変化をたどったと考えられる。わずか千年ほどの間にも、言語はどんどん変化するわけである。

\* ある漢字がそれぞれの時代にどのように発音されたかを知るには、漢字以外の文字で中国語を記した資料が必要である。主なものとしては、清代には満洲文字による資料(1761年の『清文啓蒙』三行本や1685年の『清書千字文』など)があり、明代にはローマ字資料(1626年の『西儒耳目資』など)やハングル資料(16世紀前半の『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』など)があり、元代にはペルシャ文字資料(1313年のペルシャ語訳『脈訣』中の漢字音)やパスパ字資料(13~14世紀の各種碑文、『蒙古字韻』、『パスパ字百家姓』など)があり、遼代には契丹文字資料(11~12世紀の『興宗碑』、『道宗碑』などに見られる漢字音)があり、唐末五代時期にはチベット文字資料(9~10世紀の敦煌出土資料)などがある。

### §2 音韻変化

ある言語の変化は無秩序に起こるのではない。そこには極めて体系的な規則性を見いだすことができる。例えば、「江」は唐末五代時期において「講」と同じく [kaŋ] であっただけでなく、その後の変化においても「講」と同じふるまいをする(声調を除く)。すなわち、「講」と同じく元明代には [kiaŋ] であり、現代北京音は *jiang* [tɕiaŋ] である。また唐末において全く同音の [ka] であった「加」と「家」は、元明代にも共に [kia]、現代北京音でも共に *jia* [tɕia] で、常に同音である。つまり、同じ環境にある音声は必ず同じ変化をたどるのだ。

ここで「講」の変化(*kaŋ* > *kiaŋ* > *tɕiaŋ*)と「加」の変化(*ka* > *kia* > *tɕia*)をしばし記憶に留めよう。今もし唐末において [kau] という音声があったとすると、その音声はその後どのような変化をたどるであろうか。[-u]の部分がその後も変化しないものとするれば、その他の [ka-]の部分については「講」や「加」の例に照らしてその後の変化を予想することができる。そしてその予想は的中する。(ex. 「交」*kau* > *kiau* > *tɕiau*)

このような体系的な音声の変化を通常「音韻変化」と呼んでいる。

### §3 音韻学

音韻学とは中国語の音韻変化の姿(音韻史)を追究する学問である。その目標達成のためには文献学的方法と比較言語学的方法の二つが必要となる。( §6)

### §4 時代区分

中国語の音韻史はおおよそ次のように時代区分される。(区分法はPulleyblankによる)

上古音 (Old Chinese) 周代~漢代

中古音 (Middle Chinese) 六朝後期~唐末五代

前期中古音 (Early Middle Chinese) 六朝後期・隋代

後期中古音 (Late Middle Chinese) 唐代中期~五代

近世音 (Early Mandarin) 元代~清代

当面我々にとって重要なのは中古音(特に前期中古音)である。

## §5 対象

中国語の音韻史はヨーロッパ言語の音韻史と異なり、話し言葉の音声を対象とするわけではない。四書五経などを誦める際の、個々の漢字の讀書音を対象とするのである。例えば、「今」という漢字(現代北京音 jin [tɕin])が6世紀後半の標準中国語で [kiēm] と発音されたであろうことは何とか種々の資料から推定できるけれども、だからといって当時の話し言葉の中に [kiēm] という単語が存在したとは限らない。現代中国語の中に「今(jin)」という単語が存在しないように、6世紀の中国語にもそんな単語は存在しなかったかも知れないのである。ただ、「今」という漢字を提示された場合に、6世紀後半の人々はそれを [kiēm] と発音したはずだという事にほかならない。漢字を離れて中国語の音韻史を構築することは現在の段階では非常に難しい。

## §6 方法

中国語の音韻史を理解する上で要となるのは中古音の音韻体系である。中古音を知るには主に次の三種の材料を用いる。

韻書(インショ)と韻図(インズ)

日本・朝鮮・ベトナムの漢字音

中国の現代諸方言

の韻書と韻図については後に詳しく述べるが、中古音の枠組を知るための資料である。例えば、「加」と「家」が同音であるとか、「講」と「今」の声母(語頭子音)が共通であるというような事、あるいは中古音に何種類の声母があるかという事を韻書や韻図は教えてくれる。韻書では『広韻コウイン』が、韻図では『韻鏡インキョウ』が代表的なものである。( §9, §10)

は中国の周辺国家に伝わった漢字の発音で、主要な層はいずれも唐代の標準音に基づいていると考えられる。唐という国家は当時第一級の先進国であった。特にその都長安は最大級の国際都市であり、様々な国からの留学生を迎えて、漢字文化の発信地になっていた。したがって、日本・朝鮮・ベトナムの漢字音には様々な面で唐代音の特徴が保存されている。

は全国各地の方言で、おおむね中古音を共通の源として発達してきたものと仮定されている。漢字の方言音を知るには『漢語方音字彙』( §11)という書物を用いる。 と は中古音の具体的な音価([ka]や[kiēm])のような音声記号で表わされる実際の音色)を推定する際の手がかりとなる。

音価推定の具体例として、中古音(特別に断らない限り“前期中古音”を指す)における「今」の声母の音価を考えてみよう。まず、現代諸方言での「今」の発音を調べてみると、北京語などの[tɕ-]と広東語などの[k-]の二種類に分かれる。(こういう事は『漢語方音字彙』で調べる。)これだけでは中古音で「今」の声母が[tɕ-]であったのか[k-]であったのかは判断できない。一方、韻書や韻図の分析から、「今」と「古」が中古音で同じ声母を持っている事がわかったとしよう。そこで今度は「古」について方言音を調べてみると、全ての方言で[k-]の音である。したがって、「古」は中古音でも[k-]の音であったと仮定できる。「古」と「今」は中古音で同じ声母を持っていたのだから、「今」の声母も[k-]であったという事になる。現代北京音などにおいて「今」の声母が[tɕ-]となっているのは、後続の狭母音<sup>セマホイン</sup>[-i-]の影響と考えれば説明がつく。(類例は「講」や「加」など枚挙にいとまがない。) 確認のために、日本・朝鮮の漢字音を見てみると、いずれも「今」の発音は[k-]となっている。故に中古音の「今」の声母の音価は[k-]と推定される。

常にこのように事がうまく運ぶとは限らないが、おおよその手順は以上のようなものである。この場合、韻書や韻図によって中古音の枠組があらかじめ正確に理解されていることが必要である。つまり、どの字とどの字が同じ声母を持っていたかというような事は、まず韻書や韻図による文献学的な分析を通して知るべきことであり、しかるのちに具体的な音価推定を行うのである。一般に、音声資料のない時代の音価を推定するには比較言語学の方法( §7)を用いる。中国語の場合には中古音を現代諸方言の祖語(共通の源となる言語)と仮定した上で、比較言語学の方法を適用する。現代諸方言や外国漢字音に現れた種々の言語事実を最も無理なく説明できる音価を選ぶわけである。

## §7 比較言語学の方法

言語Aと言語B(および言語C、D、E...)が文法構造や語彙において偶然とは見なしがたい類似を示すとき、それらの言語は共通の源から別々に発達してきたものと考えられる。言語Aと言語B等との比較分析によって共通の源となる言語(“祖語”という)を再構(reconstruct)し、祖語と各言語間の対応を明らかにするのが比較言語学の使命である。原則として、全ての言語に共通して見られる性質は祖語から受け継いだものと見なされる。つまり、「古」の声母が全ての方言で [k-] であるのは、祖語たる中古音の [k-] を受け継いだものと考えるのである。言語間に不一致がある場合には、どれが祖語の姿としてふさわしいかを個別に検討しなければならない。中古音における「今」の声母が [tɕ-] でなく [k-] と推定されたのは、同じ声母を持つ「古」が [k-] であるという理由のほか、tɕ- > k- よりも k- > tɕ- の方が言語として“ありがちな変化”であるという事も根拠になっている。比較言語学は19世紀ヨーロッパで発達した学問であるが、幸いにも扱った言語資料が膨大な量であるため、どのような音韻変化がより一般性を備えているかという事がかなり明らかになった。いま k- > tɕ- が“ありがちな変化”であると述べたのも、ヨーロッパにおける比較言語学の成果に基づいての事である。

中古音を現代諸方言の祖語と仮定して、比較言語学の方法で精密な音価推定を試みた最初の人物はスウェーデン人の学者ベルンハルト・カルルグレン(Bernhard Karlgren 1889-1978 一般には英語読みでカールグレンと呼ばれる)である。それまで、詩の押韻や韻書と韻図の分析のみを対象としていた中国の音韻学は、彼によって近代科学へと導かれたのである。

## §8 入門段階での目標

この入門講座では比較言語学的な作業はほとんど行なわない。というのは、入門段階での目標はあくまでも音韻学上のさまざまな基本概念を理解することにあるからである。したがって、中古音の音価を示す必要がある場合にも、そこでは一切の検証を経ることなしに提示する。その際、それぞれの音価がどのようにして決定されたかという事が気になるかも知れないが、それは入門を終えた段階で考えるべき事である。なお、中古音(前期中古音)の音価として現在もっともよく用いられるのは平山久雄「中古漢語の音韻」(『中国文化叢書 1 言語』所収、大修館1967)の中に示された推定音価であるから、我々もそれに従うことにしよう。

## 2. 資料の解説

### §9 『広韻コウイン』

正式な書名は『大宋重修広韻』であるが、一般に『広韻』と略称される。北宋の時代、西暦1008年にできた韻書である。「韻書」というのは、詩の押韻の基準を定めた辞典で、どの字とどの字が押韻可能であるか判るようになっている。当時、科挙に作詩の試験があり、正しく韻をふんでいないと及第できなかったため、このような書物が必要だったのである。我々はこの書を用いることによって、韻に関して当時の詩人たちの詩から帰納するよりもさらに正確な枠組を得られる事になる。

また、『広韻』は押韻の基準を示すだけでなく、収録字を同じ音節ごとにまとめ、反切ハツセツという方法によって全音節に発音が表示されている。これによって、『広韻』は中古音研究の中心資料となっているのである。(反切については後述)

ところで、北宋の時代に作られたにもかかわらず、なぜ中古音の資料になりうるかというと、実は『広韻』は隋の時代の『切韻セツイン』という韻書の増補版にすぎず、我々は今はなき『切韻』の代用品として『広韻』を用いるのである。西暦601年、陸法言によって編纂された『切韻』は、唐一代を通じて科挙における作詩の規範となり、幾度となく増補改訂されて宋代まで用いられた。原本の『切韻』は既に存在しないが、その増補版が今に伝わっているわけである。唐宋代に行なわれた『切韻』の増補改訂は、ほとんどが音の枠組とは関係のない部分(例えば収録字の増加や各々の字の意味に対する注記の増加など)で行なわれたため、宋代の産物である

『広韻』の音の枠組も基本的には隋代のものと考えてよいわけである。(もちろん、『広韻』の何もかも全てを隋代のものと見なすのは若干の危険を伴う。しかし、それについて詳しく説明すると話がやや専門的になるので、この入門講座ではあまり触れないことにする。「§ 21 切韻残巻」のところではほんの一例が示されている。)

なお、「中古音」という用語を狭義で用いる場合には、もっぱら『切韻』(すなわち『広韻』)から帰納される音韻体系を指す。

現在もっとも広く用いられている『広韻』は、台湾の芸文印書館から発行されているもので、収録字の索引が付いていて使いやすく、入手も容易である。

### § 10 『韻鏡』

作者不明、宋代の韻図である。「韻図」とは一種の音節全表で、日本の五十音図にあたる。五十音図同様、縦が同じ声母(語頭子音)、横が同じ韻母(一音節から語頭子音を除いた部分)という配列になっている。ただし、中国語は音節の数が多いので一枚の紙に収まらず、『韻鏡』の場合には43枚を費やしている。

『韻鏡』は中国では早くに散佚し、日本にのみ伝わった。巻頭には1161年と1203年の序文があるが、原本は少なくとも唐末ごろには存在したと見られている。したがって、唐末ごろの音韻体系(すなわち後期中古音)を反映する部分があるので、『広韻』によって帰納される隋代の音韻体系(前期中古音)とは多少のズレがある。しかし、『広韻』によっては得られない種々の情報が盛り込まれているため、前期中古音を考える上でもやはり貴重な資料なのである。

『広韻』と同様に、『韻鏡』も台湾の芸文印書館のものが一般に利用されている。

### § 11 『漢語方音字彙』

1962年に初版が、1989年に第2版が文字改革出版社より刊行された。これは個々の漢字の方言音を集めたもので、主要な方言区の漢字音はこの書によって知ることができる。

中古音の枠組は『広韻』や『韻鏡』によって知られるが、それらの具体的な音の差異を推定するには現代諸方言を参考にする必要がある。そのため、現代の資料でありながら、同時にそれは中古音の資料でもあるわけである。

この書は北京音に基づいて配列されているが、その配列は韻母を中心としたやや特殊なものなのでよく慣れる必要がある。

## 3. 『広韻』の構造

### § 12 四声で五巻に分かれる

『広韻』の構成について具体的に説明するので、まず手元に『広韻』を置きながら、ひとつひとつ確認してほしい。

『広韻』は「広韻上平声巻第一」「広韻下平声巻第二」「広韻上声巻第三」「広韻去声巻第四」「広韻入声巻第五」の全五巻からなる。(ただし現在出版されているものは、これを一冊にまとめてある。) まず、手元の『広韻』で確認してみよう。各巻の境がわかりにくいかも知れないが、版心を見ながら探すと楽である。版心には「韻上平」「韻下平」のように略記してある。(この「韻」というのは『広韻』のこと。昔の書物は版心に書名・篇名・巻数などが彫ってあることが多い。)

これらは声調によって巻を分けているのである。中古音での声調は四種類あり、それぞれ「平声」「上声」「去声」「入声」と名付けられている。声調が四種類なのに五巻になっているのは、平声に属する字の分量がたまたま多かったため、平声だけはさらに巻を上下に分けて「上平声」「下平声」としたのである。声調としては「上平声」とか「下平声」という声調があるわけではなく、どちらも同じ平声である。



### § 13 韻目

次に「上平声卷第一」のはじめを見ると、「東」「冬」「鍾」...という字が掲げられ、それぞれに「東第一」「冬第二」「鍾第三」のように番号が付いている。これらの「東」「冬」「鍾」...は「韻目」と呼ばれるもので、互いに押韻可能な字のグループの名前である。(韻目の「目」は「種目」「科目」の「目」と同様、「種類」の意。) 例えば、「東」の字と押韻可能なグループを「東韻」(トウインと読んだり、ヒガシノインと読んだりする)といい、そこには「東」のほか「同」「中」「弓」...などの多数の字が含まれる。たまたま「東」を代表字にしたにすぎない。

各韻目の下に付けた番号は、各巻ごとに「第一」から始まる。平声は単に分量の関係で上下に分けただけなのであるが、「下平声卷第二」の韻目もやはり「先第一」のように「第一」から始まるわけである。

### § 14 小韻

今度は本文を見てみよう。一番最初には、「一」という番号があって、「」があり、「東」がある。「一」は韻目の一番目である事を示す。「東」はもちろん韻目であるが、同時に「東韻」に属する第一番目の字でもある。では「」は何かというと、「小韻」の区切りを示すマークである。「小韻」とは完全に同音のグループをいう。つまり、「東」以下の十七字は、声母も韻母も(もちろん声調も)全く同じ発音ということになる。「東」から十八字めの「同」とは「」で区切られているから、「同」は別の小韻である。小韻を呼ぶときには、その第一番目の字を代表として、「東小韻」「同小韻」のように呼ぶ。したがって、「東」という字は、「東韻」の中の「東小韻」の第一番目の字ということになる。なお、各字の下に細字で記されているのは、各字の意味に関する注記である(“義注”という)。

### § 15 反切

各小韻の代表字(第一番目の字、「」の次の字)には、義注に続いて必ず反切と小韻所属字数が記される。例えば、東韻の一番最初の小韻では代表字が「東」で、反切が「徳紅切」、小韻所属字数が「十七」である。さらに、東韻の二番目の小韻では代表字が「同」、反切が「徒紅切」、小韻所属字数が「四十五」となる。前述のごとく、小韻とは「声母も韻母も全く同音のグループ」であるが、それぞれの小韻の発音を示すのが「徳紅切」「徒紅切」などの反切であり、各小韻に何個の字があるかを示すのが「十七」「四十五」などの小韻所属字数である。反切と小韻所属字数は、小韻代表字の注の末尾に記される。そもそも、小韻所属字数などというものはあまり必要なものでもないが、それを律儀に記すところが中国の書物らしいところである。(『広韻』の巻頭には、さらに、収録字の総数と注の全字数が記されている。)

さて、反切とは何かという問題に移ろう。反切とは、漢字二字を用いて別の漢字一字の発音を示す方法である。形式は、『広韻』では「××切」である。(唐代までは「××反」と記した。故に「反切」という。)'××'のうち、上の字(反切上字という)が声母を示し、下の字(反切下字という)が韻母と声調を示す。「東」の字の反切「徳紅切」を例にとると、「徳」が声母を、「紅」が韻母と声調を示している。言い換えれば、「東」と「徳」は声母が同じであり、「東」と「紅」は韻母と声調が同じである。現代北京音と日本漢字音で確認してみよう。北京音は暫時ピンインで示す。

東(dong) = 徳(de) + 紅(hong)

東(tou) = 徳(toku) + 紅(kou)

この場合、北京音では「東」(第1声)と「紅」(第2声)の声調が合わないが、中古音においてはともに平声である。(中古音と現代北京音との声調の対応関係については、『韻鏡』の構造を検討する際に説明しよう。)

反切によって音を帰納される字(つまり反切が付けられている字、「徳紅切」の場合は「東」)を「帰字」または「被切字」という。『広韻』の場合は各小韻の代表字が「帰字」になっている。

### § 16 練習

それではここで練習として、次頁の表に「東韻」の各小韻の反切を書き出してみよう。注意しなければならないのは、「又切」をひろわない事である。「又切」とは、帰字にふたつ以上の発音があった場合、その小韻の音

とは別の音を「又××切」の形で表わしたものをいう。例えば、「中」の注の末尾に「陟弓切又陟仲切四」とあるのは、「中小韻」の音が「陟弓切」で、「中」の字にはほかに「陟仲切」の音もあるという事である。

小韻代表字	反切	北京音(ピンイン)	日本漢字音	小韻代表字	反切	北京音(ピンイン)	日本漢字音
1 東	徳紅	dong	トウ	18			
2				19			
3				20 隆			
4				21			
5				22			
6				23			
7				24			
8				25			
9				26			
10 弓				27			
11				28			
12				29 通			
13				30			
14				31			
15				32			
16				33			
17				34			

注意事項：

18番目の豊小韻の反切が見にくいかも知れない。この箇所は、『広韻』ではもともと「敷空切」であったのを、「敷隆切」に訂正したものである。「空」に×が付いていて、上欄に「隆」と書いてあるのは、そのことを意味する。訂正したのはもちろん現代の学者で、周祖謨シュウソボという人物だ。我々の使っている台湾版の『広韻』は周祖謨の校訂を取り入れているため、所々にその書き込みがある。

32番目の烘小韻では「呼東切又音紅六」とあるが、「又音紅」の部分は又切と同様に「烘」の字に「呼東切」以外の発音があることを示している。又切の場合は反切を用いるのであるが、ここでは直接に「紅」と同じ発音もあるという意味で「又音紅」と記されている。このようなタイプを「又音」という。小韻の音として示された反切と、個別の字に対する反切や又音を混同しない事が大切だ。

§ 17 韻と韻母

ひとつの韻に収められた字が全て同一の韻母を持つとは限らない。韻母における差異(例えば、i介音やu介音の有無)が微細で押韻の妨げにならないと判断されれば、複数の韻母がひとつの韻の中に存在すること

がありうるのである。そこで、それぞれの韻の中に何種類の韻母があるかを確認する必要がある。それには「反切系連法」を用いる。「反切系連法」というのは、文字どおり反切を系連させて(つまり、ツナギアワセテ)、グループわけを行なう方法である。この方法は声母に対しても有効なのであるが、当面の問題は韻母なので、韻母に関する実例を示そう。

(中国語の音節の構造)

声母 Initial	韻母 (Final)		
	介音 Medial	主母音 Vowel	韻尾 Ending

東: 徳紅切

同: 徒紅切

反切の原理により、「東」の韻母は「紅」の韻母と同じである。また、「同」の韻母も「紅」の韻母と同じである。したがって、「東」と「同」は同一の韻母を有する事になる。このほか、もし「東」や「同」を反切下字にもつ字があれば、それらの字の韻母もやはり同一という事になる。このような方法を重ねてゆき、グループわけをしてみれば、ひとつの韻の中に何種類の韻母があるかを確認できるわけである。この方法は清朝の陳澧<sup>チンレイ</sup>という学者の著した『切韻考』で提示された。

### § 18 練習

練習として、「東韻」で反切系連法を実行してみよう。練習 で作成した表を使えばよい。二種類の韻母があるのを確認できるはずである。やり方は、まず「東」やその反切下字「紅」を で囲み、仲間をどんどん増やしてゆく。それが一通り終わったら、今度は残りのもの(例えば反切下字の「弓」や「中」)を で囲んで、その仲間を増やしてゆく。最後まで と が仲間にならなかつたら、韻母がふたつある(かも知れない)という事になる。では、セッセと頑張ろう。

<以下の注意書きは自分で作業をしてみてから読むのだ! >

13番目の「菅: 莫中切」と23番目の「蒙: 莫紅切」に同じ反切上字がある事の意味をよく考えてみよう。

[ヒント: 『広韻』ではふたつの小韻が同じ音を表わす事はない。]

14番目の「穹: 去宮切」がいずれとも系連しない、とお嘆きの方へ。反切下字の「宮」がどの小韻に属する字かを調べるべし。当然この字は「東韻」に属するはずだから、東韻を最初からずっと見てもよいし、巻末の索引を使っても結構。

18番目の「豊: 敷隆切」は練習 で確認したとおり、『広韻』ではもともと「敷空切」であった。もし「敷空切」で反切系連法を適用するとどうなるだろうか。「豊小韻」が のグループに入ってしまう。そうなっては困るので、周祖謨という学者が「敷隆切」に訂正したのである。何が困るかというと、「豊小韻」が のグループに含まれる事は、実は『韻鏡』などの韻図の分析によって判っているのだ。(どのように判っているかについては後述)

作業が無事おわると、東韻に二種類の韻母があることが確認できる。反切下字を日本漢字音で読むとわかるが、かたや直音(トウ、コウ、ロウ...のように)で、かたや拗音(チュウ、キユウ、リュウ...のように)である。したがって、東韻の二種類の韻母の違いは介音の有無によるものと考えられる。

### § 19 練習

もうひとつ反切系連法の練習をしておこう。今度は、平声「東韻」に対応する上声の「董韻」である。平声が二種類に分かれるのだから上声も二種類に分かれるだろう、と予想されるのだが.....どうなるか確認しよう。まずは次頁の表に反切の書き出しから、どうぞ。

### § 20 練習

反切系連法の概念はだいたい理解できたと思うので、次に韻目そのものの理解を深めよう。つまり、韻目の各名称に慣れるとともに、どの韻とどの韻が近いか(あるいは遠いか)を、『広韻』の注記と現代諸方言などから探るのである。とりあえず平声の韻目について11頁と12頁の表に情報を書き込もう。上平声が28韻、下平声が29韻である。

(練習)

小韻代表字	反切	北京音(ピソイン)	日本漢字音	小韻代表字	反切	北京音(ピソイン)	日本漢字音
1				8			
2				9			
3				10			
4				11			
5				12			
6				13			
7				14			

§ 21 切韻残巻

練習 で「東韻」の各小韻を書き出した際に、「豊」の反切を「敷空切」から「敷隆切」に訂正し、練習 ではそれにしたがって反切系連法を実行したのであるが、そのことについて少し説明しておこう。

§ 9でも述べたように、『広韻』(1008年)は『切韻』(601年)の増補改訂版である。たまたま音の枠組みにはほとんど手が加えられていないので、我々は今はなき『切韻』の代用品として『広韻』を用い、隋代の音の枠組みを探っているわけである。しかし、『切韻』と『広韻』が完全に同じというわけではない。反切にも若干の部分ながら手が加えられた箇所がある。その例が「豊：敷空切」である。『切韻』ではもともと「豊」の反切は「敷隆切」(より正確には「敷隆反」)であった。ところが唐の玄宗皇帝の名が「隆基」であったために、「隆」の字は公の書物で用いることができなくなった。これは避諱ヒキと言って、昔は皇帝の名前と同じ文字をみだりに使うことは畏れ多い事だったので。そこで、玄宗皇帝(在位712-756)以後の『切韻』では「敷隆反」の反切下字「隆」がほかの文字に取り替えられる事になる。もっとも、『広韻』は宋代の産物なので、本来なら唐の皇帝の諱イミナを避ける必要はさらさらないのであるが、『広韻』の編纂者たちが基づいた『切韻』がすでに原本の隋の『切韻』ではなく、玄宗以後の『切韻』であったため、『広韻』でもそれにしたがって「敷空切」となっているわけである。なお、『広韻』という書名は「切韻を広めたもの」つまり「増補版の切韻」というほどの意味である。『切韻』の増補はすでに唐の時代に盛んにおこなわれ、書名を『唐韻』(唐の切韻の意)と称した事もあった。

ところで、原本の『切韻』はすでに散佚サンイッして今に伝わらない。それなのに「豊」の反切が「敷空反」ではなく、もともと「敷隆反」であった事がどうしてわかるのであろうか。実は長い間『切韻』(もしくはその増補版で『広韻』より古いもの)は世の中から姿を消していたのであるが、20世紀の初頭、西域の敦煌から古い絵画や書物が多数発見された際に、幸運にも『切韻』の断片もその中に含まれていたのである。それによって、わずかな数葉ずつではあるが、原本に近いと思われるものから、かなり増補されたものまで、多種多様の『切韻』が見られるようになった。これらは一般に「切韻残巻」と総称されている(残巻とは欠落のある不完全な書物のこと)。唐の写本や五代の版本などからなるこの切韻残巻が発見されたことは大きな事件であったが、さらに驚くべき事に、北京の故宮からほとんど完全に近い唐写本の『切韻』(「刊謬補缺切韻」と題されている)が発見され、1947年に影印本が刊行された。これは唐代の増補を経た『切韻』ではあるが、『広韻』よりはずっと原本に近く、その価値は絶大である。以上のようなわけで、現在の我々は『広韻』よりも古いさまざまな『切韻』を利用することができるようになっている。そこには「豊」の反切が「敷隆反」と記されており、『広韻』の「敷空切」がのちの改変であることが知られるのである。

次頁に示したのが「刊謬補缺切韻」の模写である。「刊謬補缺」とは「誤りを正し、足りないところを補う」ということで、改訂増補版の『切韻』というわけである。最終行に「豊」小韻の反切「敷隆反」が見える。



< 平声韻目表 >

韻目	同用	北京音	梅嶼音	広州音	日本漢字音	韻尾
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						

(下平声)

韻目	同用	北京音	梅嶺音	広州音	日本漢字音	韻尾
1						
2						
3						
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						
11						
12						
13						
14						
15						
16						
17						
18						
19						
20						
21						
22						
23						
24						
25						
26						
27						
28						
29						

## § 22 四声相配

以上で『広韻』に関するおおよその説明は済んだわけであるが、少しだけ補足しておく。

まず、『広韻』の韻は四声相配シセイソウハイの原則にしたがって配列されているということである。つまり、平声・上声・去声・入声それぞれの韻の順番は、各声調ごとに別々の並べ方になっているのではなくて、平声の韻が並んでいるような順番で、他の声調も並んでいるのである。したがって、例えば各声調の一番目の韻は、声調を無視すれば同音の韻母ということになる。ただし、韻によっては四声の全てがそろわない場合があるので、機械的に対応させてゆくとだんだんとずれていってしまう。どの韻とどの韻が相配するか(つまり対応するか)については、27頁の「広韻韻目表」を参照のこと。

次に入声についてであるが、入声は四声の中でも特殊な声調である。平声・上声・去声は音の高低による純粋な声調であるが、入声は韻尾に -p, -t, -k をもつ音節をいうのである。例えば、中古音では [kap] [pat] [lak] のような音節は全て入声に配されることになる。ただし、これらの -p, -t, -k は内破音であって外破音ではない。昔の中国人はこのような短い音節を全て入声という声調としてとらえたのである。入声を他の声調に相配させる時には平声・上声・去声の -m 韻尾に対して -p 韻尾を、-n 韻尾に対して -t 韻尾を、-ŋ 韻尾に対して -k 韻尾を相配させる。入声であるかどうかを見分けることは、我々日本人には比較的たやすい。-p, -t, -k は日本漢字音(の旧仮名遣い)では、それぞれ「フ」「ツ、チ」「ク、キ」となる。例えば、合(ガフ)、日(ジツ、ニチ)、役(ヤク、エキ)のごとくである。

## § 23 練習

『広韻』に関する説明がひととおり終わったので、簡単な練習でこれまでの知識を確認してみよう。

1. 「斜」の属する韻と小韻および反切を調べよ。[巻末の索引を使う]
2. 「雄」「羽」「王」「雨」が中古音で同じ声母を持っていたことを確認せよ。 [まず、反切を調べて、その反切上字に反切系連法を適用する]
3. 平声唐韻にいくつの韻母があるか、反切系連法によって調べよ。

## 4. 『韻鏡』の構造

## § 24 転図

『韻鏡』は43枚の図表(「転図」という)からなる。§ 10で述べたように、『韻鏡』は一種の音節全表であるから、この43枚の転図の中に示されている文字は、何らかの音節の代表字であって、『広韻』でいえば小韻代表字にあたる。例えば、一枚目の転図を見ると、平声東韻とそれに相配する上声董韻、去声送韻、入声屋韻の各韻が収められているが、この転図の中に記されている文字は、『広韻』における各韻の小韻代表字とほとんど一致する。つまり、『広韻』(もしくはそれに近い韻書)の全小韻(つまり全音節)を表にしたものが『韻鏡』なのだと言える。ただし、§ 10でも述べたように『広韻』の体系と『韻鏡』の体系には多少のズレがある事を心に留めておこう。

各転図を呼ぶときには、「一枚目の転図」「二枚目の転図」というのは面倒なので、普通は「第一転」「第二転」のように呼んでいる。一番最後が「第四十三転」である。途中の転図が第何転であるかを知るには、各転図の右端を見る。「内転第一開」「内転第二開合」のように記してあるので、その番号を見ればよいのである。「内転」(あるいは「外転」)の意味については定説がないので、とりあえず無視しておこう。「開」は -u- 介音を持たない韻母のことで、「開口」の略であり、「合」は -u- 介音を持つ韻母のことで、「合口」の略。それでは「開合」というのは何かというと、実はこれもよくわかっていない。いずれにせよ『韻鏡』における「開」「合」の表示にはいろいろと考慮すべき問題があるので、入門の段階ではあまり気にしない方がよい。

## § 25 五音

さて、各転図の構成であるが、大まかに言えば、日本の五十音図と同様に、縦に同じ声母の字が並び、横に同じ韻母の字が並んでいると思ってよい。ただし、五十音図よりも『韻鏡』の方がはるかに複雑なつくりになっているので、慣れるまでには若干の訓練が必要である。

はじめに、声母に関する事柄から見てゆこう。声母はまず、右から順に「唇音」(p系)、「舌音」(t系)、「牙音」(k系)、「齒音」(ts系)、「喉音」(h系)という「五音」の枠で区切られる。「五音」は発音部位による区別で、おおむねそれにふさわしい名が与えられている(牙音のみ注意)。一番左に「舌音齒」という枠もあるが、これに関してはあとで述べる。五音の枠の中は、さらに「清」「次清」「濁」「清濁」に細分される。これは発音方法を示したもので、「清」は無気音、「次清」は有気音、「濁」は濁音(有声音)、「清濁」は鼻音等を意味する。唇音を例にとると、それぞれ[p][pʰ][b][m](いずれも前期中古音の音価)である。このようにして23の行に各声母が振り分けられているのだが、だからといって声母が23しかないわけではない。この事については§ 29以下で詳しく考えることにしよう。

## § 26 四声と等位

次に韻母と声調であるが、各転図はまず声調によって大きく四段に分かれる。上から平声・上声・去声・入声である。そして左端に韻目が記されている。例えば第一転では、平声に「東」、上声に「董」、去声に「送」、入声に「屋」という韻目が見える。各声調の韻目は『広韻』とほぼ同じ順番であるが、平・上・去・入の四声が同時進行で記される点が『広韻』と異なる。この場合、各転図に収められている韻は原則として互いに相配関係(§ 22)にある韻である。したがって、第十二転のように平声にふたつの韻が収められていれば、上声と去声にもそれに相配する韻がふたつずつ収められるわけである。もしも相配する韻が存在しなければ、そこは空欄になる。(第十二転のように入声が入声空欄になっている例が最も多いが、他の例もある。第二転の上声を見よ。)

さて、平・上・去・入の各段はさらに四段ずつに分かれる。これを上から「一等」「二等」「三等」「四等」と呼んでいる。この等位の違いによって、主母音や介音の違いを表わすのである。全く同じ韻母を持つ字は同じ等位に配される事になる。声調ごとに一等から四等まで分かれているから、横の段は全部で $4 \times 4 = 16$ 段になるわけである。

## § 27 一等韻 ~ 四等韻

一等欄に配置される韻(ないし韻母)を「一等韻」と言い、以下順に「二等韻」「三等韻」「四等韻」と称する。例えば、第一転の上声董韻を見ると、その音節(小韻代表字)は全て一等欄にあるので、董韻は一等韻である。また、第三転の各韻はいずれも二等韻である。このような等の区別が実際にどのような音の区別を表わしているかについては後で詳しく述べるので、今のところは用語をしっかりと覚えよう。ところで、一等韻、二等韻、四等韻は問題ないのだが、三等韻だけは必ずしも三等欄にのみ配置されるとは限らず、時として二等欄や四等欄にも記されることがある。例えば、第二転の平声を見ると、ふたつの韻が一緒に収められていて、冬韻が一等韻、鍾韻が三等韻であるが、鍾韻の字は四等欄にも記されている。これは声母や介音の差異を表現するための配置なのであるが、それを理解してもらうためにはやや複雑な説明を要するので、これも後まわしにしよう。三等韻に注意が必要なのだという点さえ押さえておけばよい。それぞれの配置パターンをまとめておこう。

一等韻: 一等欄にのみ配置される。

二等韻: 二等欄にのみ配置される。

三等韻: 二等、三等、四等の各欄に配置される。(ただし、二等欄に記されるものは非常に少ない)

四等韻: 四等欄にのみ配置される。

大半の韻は上のパターンのうちのいずれかひとつのみに属するのだが、稀にひとつの韻でふたつのパターンをあわせもつものがある。例えば、「東韻」(第一転)には一等韻と三等韻がある。これは東韻に二種類の韻

母がある事を意味するわけだが、その事は以前に反切系連法で確認済みである。すなわち、反切下字「紅」のグループ( のグループ)が一等韻であり、反切下字「弓」のグループ( のグループ)が三等韻である。ついでながら、練習 で問題になった「豊」が唇音次清の三等に位置することを確認しておいてほしい。「豊」が確かに のグループである事が納得できるだろう。

## § 28 練習

1. 第一転において、平声東韻「風」字は「唇音清」の「三等欄」にあるが、同じく東韻の「公」「中」はどこに位置しているか。
2. 「初」字、「本」字、「学」字はそれぞれ第何転のどこに位置しているか。[広韻の索引を使う]
3. 平声微韻は第何転にあるか、また何等韻か。
4. 去声暮韻は第何転にあるか、また何等韻か。

## § 29 三十六字母

上述のように、『韻鏡』では「五音」および「清・次清・濁・清濁」によって声母を表わしているわけだが、実はそれだけでは声母を正確にとらえる事ができない。例えば、「舌音清」では一等欄・四等欄の字と二等欄・三等欄の字は互いに異なった声母を持っている。(反切系連法によって確かめられる。)その場合、それぞれの声母を「舌音清一等四等の声母」とか「舌音清二等三等の声母」と呼ぶのはあまりにも煩雑である。そこで普通は「字母」というものを用いる。「字母」とは同じ声母を持つ多くの字の中から代表字を選んで、その声母の名称にしたものをいう。「舌音清」を例にとると、一等欄・四等欄に記される字(東、都、端、典...)はみな同じ声母を持っているが、その中から「端」を代表字にして、この声母を呼ぶのに「端母」というのである。(このように代表字の後に字母の「母」をつけて「～母」と呼ぶ。)同様に、「舌音清」の二等欄・三等欄に記される字(中、知、珍、張...)はみな同じ声母を持っているが、その中から「知」を代表字として、この声母を「知母」という。『韻鏡』の時代にはこのような字母が36個用意されていたので、「三十六字母」と称している。『韻鏡』の冒頭部分(台湾版p. 24)に三十六字母の一覧表があるので、どのような字が字母として用いられているかはそこを見ればわかる。いま例に出した「端母」と「知母」はともに「舌音清」の位置に見える。現代の我々は[p][t][k]のような記号で発音を示しているが、昔の中国には漢字しかなかったので、声母を示すのにも漢字を用いたというわけである。そして、同じ要素を持つものの中から代表字を選んでその要素の名称にする方法は、「東」「冬」「鍾」などの韻目でも行なわれたし、実は「平」「上」「去」「入」という声調の場合にも適用されていたのである。

ところで、字母の数が36という事は、つまり声母の種類を36個と認識していた事になるわけだが、それはあくまでも『韻鏡』の時代(唐末?)の事であって、我々が対象としている『切韻』の時代(隋代)とは多少のズレを生じている。そこで前期中古音の研究においては、いくつかの点を手直した上でこの三十六字母を用いる事になっている。以下、それらの点について、五音の枠ごとに説明する。

## § 30 唇音(幫滂並明・非敷奉微)

『韻鏡』では「幫<sub>ホウ</sub>滂<sub>ホウ</sub>並<sub>ヘイ</sub>明<sub>メイ</sub>」の各字母を「唇音重」、「非<sub>ヒ</sub>敷<sub>フ</sub>奉<sub>ホウ</sub>微<sub>ヒ</sub>」を「唇音軽」と称しているが、現在ではそれぞれ「重唇音」「軽唇音」と呼びならわしている。重唇音とは音声学でいう両唇音のことで、上下の唇を使って調音する(つまり発音する)音をいう。一方、軽唇音とは唇歯音のことで、上歯と下唇を使って調音する音である。具体的には、重唇音は幫母[p]、滂母[pʰ]、並母[b]、明母[m]であり、軽唇音は非母[f]、敷母[fʰ](>[f])、奉母[v]、微母[m̥](>[w]>[ʃʌ])という事になる。しかし、実は『切韻』の時代(隋代)には軽唇音は存在しなかったと考えられる。軽唇音は唐代に重唇音の一部から分かれ出たのである。隋代以前に軽唇音がなかった事は『広韻』の反切にもよく反映されていて、幫母の歸字に対して非母の反切上字が用いられるような例が多数見られる。(ex. 兵<sub>フ</sub>甫<sub>フ</sub>明<sub>フ</sub>切 - 兵は幫母、甫は非母)つまり、隋代以前には幫母 = 非母であったし、同様に滂母 = 敷母、並母 = 奉母、明母 = 微母であった。軽唇音の重唇音からの分化を「軽唇音化」と呼ぶ。軽唇音は現代北京音で[f](非敷奉)か[ʃʌ](微)になっているので、どの字が軽唇音化をこうむっ

たかはすぐにわかる。(『韻鏡』の転図をながめても、どれが軽唇音かは判らない。)具体的には、東(三等)・鍾・微・虞・廢・文・元・陽・尤・凡の諸韻およびその相配する韻において軽唇音化が起こっている。これらはいずれも三等韻であるが、三等韻の中にも軽唇音化を生じなかった韻もある。何を条件として軽唇音化が起こったかというのは、中古音研究の興味深いテーマのひとつであるが、ここではふれない。参考文献として平山久雄「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」(『北海道大学文学部紀要』15の2、1967)を紹介するにとどめよう。

いずれにせよ、前期中古音の唇音声母としては、[p](幫=非)[p'](滂=敷)[b](並=奉)[m](明=微)の四種類でよい。したがって、本来ならばここで幫滂並明だけを採用して、非敷奉微を切り捨ててもよいのであるが、実際には後の音韻変化や北京音との対応を考慮に入れると、非敷奉微の四字母も用いる方が便利なので、ここでは多少複雑だが、八個の字母を覚える事にしよう。それぞれの声母は現代北京音では次のようにあらわれる。

<表1>	中古音	北京音
清 幫母	[p]	[p](ピンイン b)
次清滂母	[p']	[p'](p)
濁 並母	[b]	平声[p'](p) 仄声[p](b)
清濁明母	[m]	[m](m)
-----		
清 非母	[p]	[f](f)
次清敷母	[p']	[f](f)
濁 奉母	[b]	[f](f)
清濁微母	[m]	[ʍ](w)

濁音の声母に注意が必要である。並母は平声か否かという声調を条件として、平声なら有気音、それ以外なら無気音になる。奉母は摩擦音になってしまったので有気と無気の対立はない。また、北京音と中古音の声調の対応は、声母の清濁を条件に以下のようにになっている。

<表2>	清	次清	濁	清濁
平声	1	1	2	2
上声	3	3	4	3
去声	4	4	4	4
入声	?	?	2	4

「清」「次清」「濁」「清濁」にそれぞれ幫滂並明や非敷奉微をあてはめればよい。これは唇音に限らず、他の声母でも同様の対応関係である。入声の「清」と「次清」は1声から4声まで無規則にあらわれる。

次に、日本漢字音との対応を示しておこう。重唇音と軽唇音は全く区別されない。

<表3>	中古音	呉音	漢音
幫母・非母	[p]	八行	八行
滂母・敷母	[p']	八行	八行
並母・奉母	[b]	バ行	八行
明母・微母	[m]	マ行	バ行(一部マ行)

さて、中古音と北京音および日本漢字音との対応を実例で確かめてみよう。

「本」(幫母)	北京音「ben 3 [p]	呉音「ホン」	漢音「ホン」
「篇」(滂母)	北京音「pian 1 [p']	呉音「ヘン」	漢音「ヘン」
「平」(並母)	北京音「ping 2 [p']	呉音「ピョウ(ビャウ)」	漢音「ヘイ」
「馬」(明母)	北京音「ma 3 [m]	呉音「メ」	漢音「バ」
「方」(非母)	北京音「fang 1 [f]	呉音「ホウ(ハウ)」	漢音「ホウ(ハウ)」
「費」(敷母)	北京音「fei 4 [f]	呉音「ヒ」	漢音「ヒ」

「凡」(奉母) 北京音「fan 2 [f]」 呉音「ボン」 漢音「ハン」  
 「文」(微母) 北京音「wen 2 [ʋ]」 呉音「モン」 漢音「ブン」

§ 31 練習

1. 空欄を埋める。

- a. 「亡」( ) 母) 北京音「wang 2 [ʋ]」 呉音「 (マウ) 」 漢音「 ( ) 」  
 b. 「波」( ) 母) 北京音「bo 1 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 c. 「貧」( ) 母) 北京音「pin 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」  
 d. 「名」( ) 母) 北京音「ming 2 [ ]」 呉音「 (ミャウ) 」 漢音「 」  
 e. 「煩」( ) 母) 北京音「fan 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」

2. 以下の字を呉音と漢音で読む。

- f. 「米」(明母) j. 「奉」(奉母)  
 g. 「木」(明母) k. 「兵」(幫母)  
 h. 「微」(微母) l. 「武」(微母)  
 i. 「無」(微母) m. 「白」(並母)

3. 以下の字が何母か推測する。(わからなければ『広韻』の索引を引き、『韻鏡』の位置を調べる)

- n. 「門 men 2」 r. 「物 wu 4」  
 o. 「美 mei 3」 s. 「聞 wen 2」  
 p. 「風 feng 1」 t. 「万(萬) wan 4」  
 q. 「望 wang 4」 u. 「房 fang 2」

§ 32 舌音(端透定泥・知徹澄娘)

舌音には「端タン透トウ定テイ泥デイ」と「知チ徹テツ澄チョウ娘ジョウ」の八字母がある。『韻鏡』では端透定泥を「舌頭音」、知徹澄娘を「舌上音」と称する(台湾版p.24参照)。舌頭音と舌上音は補い合う分布を示しており、一等欄と四等欄は必ず舌頭音、二等欄と三等欄は必ず舌上音である。日本漢字音でタ行に読まれるものは全て舌音であるが、そのうち北京音で捲舌音(ピンインの zh, ch)になるものが舌上音である。以下の対応を見よ。

<表4>		中古音	北京音	呉音	漢音
清	端母	[t]	[t](ㄊㄊㄣ ㄉ)	タ行	タ行
次清	透母	[tʰ]	[tʰ](ㄊ)	タ行	タ行
濁	定母	[d]	平声[tʰ](ㄊ) 仄声[t](ㄉ)	ダ行 "	タ行 "
清濁	泥母	[n]	[n](ㄋ)	ナ行	ダ行(一部ナ行)
-----					
清	知母	[tʃ]	[tʃ](ㄓ)	タ行	タ行
次清	徹母	[tʃʰ]	[tʃʰ](ㄔ)	タ行	タ行
濁	澄母	[dʃ]	平声[tʃʰ](ㄔ) 仄声[tʃ](ㄓ)	ダ行 "	タ行 "
清濁	娘母	[n]	[n](ㄋ)	ナ行	ダ行(一部ナ行)

北京音における有気・無気のあられ方、あるいは日本漢字音における清濁のあられ方などは、唇音の場合と平行している。舌頭音と舌上音の区別は北京音にはよく反映されるが、日本漢字音では明確でない。その北京音にしても、特に拗音の場合、泥母と娘母の区別は判然としないが、このあたりはあまり神経質に考える必要はない。(直音はほとんどが泥母である。)

なお、声調の対応関係については唇音と同様であるが、念のためもう一度だけ対応表を掲げておく。

<表5>	清	次清	濁	清濁
平声	1	1	2	2
上声	3	3	4	3
去声	4	4	4	4
入声	?	?	2	4

それでは、実例によって対応関係を確認しよう。

「丁」(端母)	北京音「ding 1 [t]」	呉音「チヨウ(チャウ)」	漢音「テイ」
「天」(透母)	北京音「tian 1 [t']」	呉音「テン」	漢音「テン」
「図」(定母)	北京音「tu 2 [t']」	呉音「ズ(ツ)」	漢音「ト」
「奴」(泥母)	北京音「nu 2 [n]」	呉音「ヌ」	漢音「ド」
「張」(知母)	北京音「zhang 1 [tʂ]」	呉音「チヨウ(チャウ)」	漢音「チヨウ(チャウ)」
「抽」(徹母)	北京音「chou 1 [tʂ']」	呉音「チュウ(チウ)」	漢音「チュウ(チウ)」
「重」(澄母)	北京音「zhong 4 [tʂ]」	呉音「ジユウ(チ'ユウ)」	漢音「チヨウ」
「女」(娘母)	北京音「nü 3 [n]」	呉音「ニョ」	漢音「ジヨ(チ'ヨ)」

### § 33 練習

1. 空欄を埋める。

- |            |                |             |           |
|------------|----------------|-------------|-----------|
| a. 「頭」( 母) | 北京音「tou 2 [ ]」 | 呉音「 ( )」    | 漢音「 」     |
| b. 「豆」( 母) | 北京音「dou 4 [ ]」 | 呉音「 ( )」    | 漢音「 」     |
| c. 「単」( 母) | 北京音「dan 1 [ ]」 | 呉音「 」 =     | 漢音「 」     |
| d. 「展」( 母) | 北京音「zhan 3[ ]」 | 呉音「 」 =     | 漢音「 」     |
| e. 「直」( 母) | 北京音「zhi 2 [ ]」 | 呉音「 ( )」    | 漢音「 」     |
| f. 「超」( 母) | 北京音「chao 1[ ]」 | 呉音「 (テウ)」 = | 漢音「 (テウ)」 |
| g. 「内」( 母) | 北京音「nei 4 [ ]」 | 呉音「 」       | 漢音「 」     |
| h. 「男」( 母) | 北京音「nan 2 [ ]」 | 呉音「 」       | 漢音「 」     |

2. 次の読みが呉音か漢音かを当てる。

- |                        |                      |
|------------------------|----------------------|
| i. 「男女」(ダンジヨ<タンチ'ヨ>)   | m. 「地面」(ジメン<チ'メン>)   |
| j. 「大名」(ダイミョウ<ダイミ'ャウ>) | n. 「図書」(トシヨ)         |
| k. 「兄弟」(キョウダイ)         | o. 「定規」(ジヨウギ<チャウキ'>) |
| l. 「境内」(ケイダイ)          | p. 「貴重」(キチヨウ)        |

3. 何母か推測する。

- |                     |                            |
|---------------------|----------------------------|
| q. 「同 tong 2」       | t. 「道 dao 4」               |
| r. 「提 ti 2」(ヒト:菩提樹) | u. 「沈 chen 2」(ヒト:沈丁花)      |
| s. 「南 nan 2」        | v. 「点 dian 3」(ヒト:第3声に濁音なし) |

### § 34 牙音(見溪群疑)

牙音には「見ケン溪ケイ群ケン疑ギ」の一列しかない。唇音や舌音よりは単純である。ただし、北京音においては-i介音(もしくは-ü介音)があるかどうかであらわれ方が異なる(つまり直音か拗音かで声母が異なる)。見母と溪母は韻母が直音の場合、それぞれピンインで g- / k-, 拗音の場合には j- / q- となる。群母は拗音の韻母としか結合しないので、すべて j- か q- である。また、疑母がゼロ声母になる事に注意。

声母と声調の対応は唇音や舌音の場合と全く同じなので省略する。次頁の対応表と実例によって確認しよう。



らない場合には、熟語を探す必要がある。例えば、「合」と「号」はともに「ゴウ」だが、熟語では「合唱ガッショウ」「号泣ゴウキョウ」であるから、「合」は入声だが、「号」は入声ではない。北京音が -n, -ŋ で終わるものには入声はない。なぜなら、入声とは、中古音で -p, -t, -k の韻尾を持ったものであるから、-n -ŋ のような鼻音になるはずがないのである。中古音の -p, -t, -k は北方方言では脱落するので、中古音で入声だったものは北京音ではすべて母音終りになる。北京音で2声無気音のものはすべて入声。北京音で2声になるのは平声と入声だけであるが、平声ならば必ず有気音になっているはずだから、無気音のものは入声という事になる。

### 非鼻音化

唐代長安音(後期中古音)の特徴のひとつに「非鼻音化」と呼ばれるものがある。これは、前期中古音において鼻音(m-, n-, ŋ-)であった声母が、その鼻音的性格を弱めて有声破裂音に近づいてゆく現象である。具体的には、「m mb, n nd, ŋ ng」という事。この後期中古音の特徴は日本の漢音に明瞭に反映される。「木」(呉音モク、漢音ボク)、「内」(呉音ナイ、漢音ダイ)など。ほかに敦煌出土のチベット文字資料や、唐代の漢訳仏典中の梵語音訳にも非鼻音化が反映している。なお、この特徴は長安を中心とした西北地域に限られたようで、北京音などには受け継がれていない。

### 疑母

疑母の中古音の音価は[ŋ]であるが、北京音ではその声母は脱落して、ゼロ声母になる。注意しなければならないのは、ゼロ声母になるのが疑母だけではないという事である。唇音の微母もゼロ声母になっているし、実は後で出てくるものの中にもゼロ声母になるものがある。したがって、単にゼロ声母だというだけで疑母だと決めつけしないで、必ず日本漢字音を参照する必要がある。北京音でゼロ声母の場合、日本漢字音でガ行ならば疑母、マ行バ行ならば微母である。また、疑母は日本漢字音では呉音でも漢音でもガ行になるという点にも注意が必要である。つまり、疑母に関しては、日本漢字音から非鼻音化の形跡を窺うことが事がない。

### 唇音・舌音・牙音のまとめ

<表7>

牙 音				舌 音				唇 音				
清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清	
疑	×	溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫	一等
疑	×	溪	見	娘	澄	徹	知	明	並	滂	幫	二等
疑	群	溪	見	娘	澄	徹	知	明/微	並/奉	滂/敷	幫/明	三等
疑	群	溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫	四等

転図内の位置によって声母が決まっているので、『韻鏡』を開けばどの字が何母かはたちどころに判る。ただし、唇音の三等だけは、重唇音の「幫滂並明」であるか軽唇音の「非敷奉微」であるかは『韻鏡』だけでは判らず、北京音を参照しなければならない。北京音で[f]か[ʃ]ならば軽唇音である。

## § 37 練習

1. 以下の字の『韻鏡』における位置(第何転、声調、所属韻、五音、清濁、何等)および三十六字母で何母かを調べる。

- |           |           |
|-----------|-----------|
| a. 「加」    | g. 「輕(輕)」 |
| b. 「母」    | h. 「重」    |
| c. 「郡」    | i. 「尾」    |
| d. 「程」    | j. 「業」    |
| e. 「条(條)」 | k. 「慶」    |
| f. 「橋」    | l. 「国(國)」 |
| m. 「電」    | n. 「岸」    |

2. 以下の北京音について、中古音における声調(平上去入)と声母(三十六字母)を推測する。なお、ふたつ以上の可能性がある場合もある。

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| o. 「pang 2 [p']」 | t. 「dong 4 [t]」 |
| p. 「fang 2 [f]」  | u. 「tan 4 [t']」 |
| q. 「ban 1 [p]」   | v. 「gan 3 [k]」  |
| r. 「fan 1 [f]」   | w. 「ge 1 [k]」   |
| s. 「man 3 [m]」   | x. 「kan 4 [k']」 |

### § 38 歯音(精清従心邪・照穿牀審禪)

歯音は五音の中でも最も複雑な部分である。歯音のうち、「精セイ清セイ従ジュウ心シン邪ジャ」を歯頭音、「照ショウ穿セン牀ショウ審シン禪ゼン」を正歯音と称する。『韻鏡』(台湾版p.25)ではこれらのうち「心邪」の二母を「細歯頭音」、同様に「審禪」を「細正歯音」として呼び分けているが、現在では普通区別しない。転図では歯頭音(精清従心邪)が一等欄・四等欄に、正歯音(照穿牀審禪)が二等欄・三等欄に記される。これは舌音における舌頭音(一等・四等)と舌上音(二等・三等)の分布と全く同じあらわれ方である。歯音は日本漢字音ではすべてサ行(あるいはザ行)になる。

### § 39 歯頭音(精清従心邪)

正歯音は多少やっかいなので、まずは歯頭音から見る事にしよう。歯頭音は現代北京音では直音か拗音かで声母が異なる。

<表8>	中古音	北京音	呉音	漢音
清 精母	[ts]	[ts](ピㄣㄨㄣ z) / [tɕ](j)	サ行	サ行
次清 清母	[ts']	[ts'](c) / [tɕ'](q)	サ行	サ行
濁 従母	[dz]	平声 [ts'](c) / [tɕ'](q) 仄声 [ts](z) / [tɕ](j)	ザ行 "	サ行 "
清 心母	[s]	[s](s) / [ɕ](x)	サ行	サ行
濁 邪母	[z]	[s](s) / [ɕ](x)	ザ行	サ行

歯音には「清濁」の声母がない。従母と邪母が「濁」である。注意しなければならないのは、北京音で拗音の場合に[tɕ](j)や[tɕ'](q)があらわれる事である。すでに見たように、牙音においても拗音で[tɕ](j)と[tɕ'](q)があらわれるので、北京音だけでは牙音か歯音かの区別がつかない事がある。このような時には日本漢字音で読んで、カ行・ガ行なら牙音、サ行・ザ行なら歯音と判断する。次の例を牙音の例とよく比較してみよう。

「再」(精母)	北京音「zai 4 [ts]」	呉音「サイ」	漢音「サイ」
「尖」(精母)	北京音「jian 1 [tɕ]」	呉音「セン」	漢音「セン」
「倉」(清母)	北京音「cang 1 [ts']」	呉音「ソウ(サウ)」	漢音「ソウ(サウ)」
「浅」(清母)	北京音「qian 3 [tɕ']」	呉音「セン」	漢音「セン」
「存」(従母)	北京音「cun 2 [ts']」	呉音「ゾン」	漢音「ソン」
「情」(従母)	北京音「qing 2 [tɕ']」	呉音「ジョウ(ジャウ)」	漢音「セイ」
「三」(心母)	北京音「san 1 [s]」	呉音「サン」	漢音「サン」
「小」(心母)	北京音「xiao 3 [ɕ]」	呉音「ショウ(セウ)」	漢音「ショウ(セウ)」
「随」(邪母)	北京音「sui 2 [s]」	呉音「ズイ」	漢音「スイ」
「象」(邪母)	北京音「xiang 4 [ɕ]」	呉音「ゾウ(ザウ)」	漢音「ショウ(シャウ)」

### § 40 練習

1. 空欄を埋める。

- a.「就」( 母) 北京音「jiu 4 [ ]」 呉音「 」 漢音「 (シウ)」  
 b.「前」( 母) 北京音「qian 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」  
 c.「千」( 母) 北京音「qian 1 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 d.「先」( 母) 北京音「xian 1 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 e.「子」( 母) 北京音「zi 3 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 f.「自」( 母) 北京音「zi 4 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」  
 g.「旬」( 母) 北京音「xun 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」

2. 次の字の中古音の声調(平上去入)と声母(何母か)を推測する。

- h.「秋 qiu 1」 1.「在 zai 4」  
 i.「四 si 4」 m.「祖 zu 3」  
 j.「寺 si 4」 n.「俗 su 2」  
 k.「静 jing 4」 o.「残 can 2」

3. 次の字には歯音と牙音が混在している。歯音のものはどれか。

- 北京音 j-[tɕ] :「将」「九」「江」「交」「件」「酒」「今」  
 q-[tɕʰ] :「侵」「丘」「七」「切」「氣」「去」「全」

### § 41 正歯音(照穿牀審禪)

正歯音が『韻鏡』の各転図で二等と三等に位置する事はすでに述べた通りであるが、実は、『広韻』の反切用字の調査によって、二等欄に置かれた字と三等欄に置かれた字では中古音での声母が異なっていた事が知られている。つまり、反切系連法を行なうと、二等字の反切上字と三等字の反切上字が系連しないのである。したがって、『切韻』の時代(隋代)には異なっていた二系列の声母が、『韻鏡』の時代(唐末?)には全く同じか非常に近い音になったものと考えられる。そこで、ここでは二等字の系列を「照<sub>2</sub>穿<sub>2</sub>牀<sub>2</sub>審<sub>2</sub>禪<sub>2</sub>」、三等字の系列を「照<sub>3</sub>穿<sub>3</sub>牀<sub>3</sub>審<sub>3</sub>禪<sub>3</sub>」と記すことにしよう。これらは現代北京音では全く区別されず、一律に捲舌音(zh, ch, sh)で表れる。日本漢字音は歯頭音と同様サ行・ザ行である。

<表9>	中古音	北京音	呉音	漢音
清 照 <sub>2</sub> 母 [tɕ] / 照 <sub>3</sub> 母 [tɕ]	[tɕ] (ヒソイン)	zh	サ行	サ行
次清 穿 <sub>2</sub> 母 [tɕʰ] / 穿 <sub>3</sub> 母 [tɕʰ]	[tɕʰ] (ch)		サ行	サ行
濁 牀 <sub>2</sub> 母 [dʒ] / 牀 <sub>3</sub> 母 [dʒ]	平声 [tɕʰ] (ch)		ザ行	サ行
	仄声 [tɕ] (zh)		"	"
清 審 <sub>2</sub> 母 [ɕ] / 審 <sub>3</sub> 母 [ɕ]	[ɕ] (sh)		サ行	サ行
濁 禪 <sub>2</sub> 母 [ʒ] / 禪 <sub>3</sub> 母 [ʒ]	[ɕ] (sh)		ザ行	サ行

現代北京音でも日本漢字音でもほとんどの場合正歯音二等と三等の区別がつかないので、例えば何かの字が照母である事までは判っても、照<sub>2</sub>母なのか照<sub>3</sub>母なのかは『韻鏡』にいちいちあたらなければならない。とはいえ、入門の段階ではそこまで気にする必要はなく、とりあえずは照母である事が判るようであればそれで十分である。むしろ注意しなければならないのは、北京音で捲舌音になるのは正歯音だけでなく、舌上音にもあるという事だ。北京音で zh[tɕ], ch[tɕʰ] の声母を持つものは、日本漢字音でサ行・ザ行なら正歯音、タ行・ダ行なら舌上音である。

### § 42 練習

1. 空欄を埋める。(二等か三等かは無視してもよい)

- a.「真」( 母) 北京音「zhen 1 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 b.「書」( 母) 北京音「shu 1 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 c.「成」( 母) 北京音「cheng 2 [ ]」 呉音「 (シヤウ) 」 漢音「 」

d. 「神」( 母)	北京音「shen 2 [ ]」	呉音「 」	漢音「 」
e. 「車」( 母)	北京音「che 1 [ ]」	呉音「 」 =	漢音「 」
f. 「臣」( 母)	北京音「chen 2 [ ]」	呉音「 」	漢音「 」
g. 「示」( 母)	北京音「shi 4 [ ]」	呉音「 」	漢音「 」

2. 次の字には正歯音と舌上音が混在している。正歯音のものはどれか。

北京音 zh-[tʂ] : 「知」「章」「張」「戰」「正」「中」  
 ch-[tʂʰ] : 「初」「遲」「重」「唱」「沈」「産」

### § 43 喉音(影曉匣喻)

喉音には「影エイ曉ギョウ匣コウ喻ユ」の四字母があるが、前期中古音の声母としては喻母が喻3母(喻母三等)と喻4母(喻母四等)とに分かれる。対応表を見よ。

<表10>	中古音	北京音	呉音	漢音
清 影母	[ʔ]	[ʈʰ] (ヒンイン ʈʰ, w, y)	ア行	ア行
清 曉母	[h]	[h](h) / [ç](x)	カ行	カ行
濁 匣母	[ɦ]	[h](h) / [ç](x)	ガ行(一部ワ行)	カ行
清濁 喻3母	[ɦ]	[ʈʰ] (ʈʰ, w, y)	ワ行(ヤ行)	ヤ行(ワ行)
清濁 喻4母	[j]	[ʈʰ] (ʈʰ, w, y)	ヤ行	ヤ行

曉母の日本漢字音にはガ行で表れる若干の例外がある。実は「曉」がまさにその例外である。曉母と匣母を取り違えないように注意しよう。

喻母は『切韻』の時代には異なるふたつの声母からなっていた(反切系連法によって知られる)。『韻鏡』では一方が三等に、もう一方が四等に置かれるので、それぞれ喻母三等(喻3)、喻母四等(喻4)と称する。そして喻3母は反切系連法によると匣母と系連するので、前期中古音では匣母と同じ声母[ɦ]であった事がわかる。ここでは北京音や日本漢字音を説明する便宜上、とりあえず匣母と喻3母を分けておく。『韻鏡』では喻3母と喻4母の扱いに多少の混乱がある。それも無理からぬ事で、喻3母は[ɦ(i)] > [j(i)]という過程を経て、『韻鏡』の時代には喻4母[j]と合流していたのである。以下、実例で確認しよう。

「安」(影母)	北京音「an 1 [ʈʰ]」	呉音「アン」	漢音「アン」
「海」(曉母)	北京音「hai 3 [h]」	呉音「カイ」	漢音「カイ」
「虚」(曉母)	北京音「xu 1 [ç]」	呉音「コ」	漢音「キョ」
「胡」(匣母)	北京音「hu 2 [ɦ]」	呉音「ゴ」	漢音「コ」
「行」(匣母)	北京音「xing 2 [ç]」	呉音「ギョウ(キヤウ)」	漢音「コウ(カウ)」
「有」(喻3母)	北京音「you 3 [ʈʰ]」	呉音「ウ」	漢音「ユウ(ウ)」
「由」(喻4母)	北京音「you 2 [ʈʰ]」	呉音「ユ」	漢音「ユウ(ウ)」

曉母、匣母ともに、北京音では拗音のとき x [ç] になるが、歯音の心母と邪母でもやはり北京音で x [ç] があらわれるので、注意が必要である。日本漢字音で読んで、カ行・ガ行なら曉母か匣母、サ行・ザ行なら心母か邪母という事になる。

また、影母と曉母が「清」、匣母が「濁」、喻母が「清濁」である事にも注意しよう。特に喻母は喻3母、喻4母ともに「清濁」である。これは声調との関係を考える上で重要である。

### § 44 練習

1. 空欄を埋める。

a. 「形」( 母)	北京音「xing 2 [ ]」	呉音「 (キヤウ)」	漢音「 」
b. 「右」( 母)	北京音「you 4 [ ]」	呉音「 」	漢音「 」
c. 「下」( 母)	北京音「xia 4 [ ]」	呉音「 」	漢音「 」

- d.「漢」( 母) 北京音「han 4 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 e.「陽」( 母) 北京音「yang 2 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 f.「煙」( 母) 北京音「yan 1 [ ]」 呉音「 」 = 漢音「 」  
 g.「希」( 母) 北京音「xi 1 [ ]」 呉音「ケ」 漢音「 」

2. 次の字には喉音と歯音が混在している。喉音のものはどれか。

北京音 x-[ɤ] : 「想」「香」「小」「学」「詳」「現」

### § 45 来母と日母

五音の枠から外れて来母と日母がある。『韻鏡』では「舌音齒」という枠に収められているが、「舌音齒」とは「舌音」と「齒音」を同時に表現したものと思われる。つまり、来母は舌音の仲間で、日母は齒音の仲間というわけで、それぞれを「半舌音」「半齒音」と称する事がある。前期中古音での音価は来母[l]、日母[ɲ]であるが、ただし、日母の方は後の音韻変化が比較的激しく、唐代には[ɲ] > [ɲ3] > [ʒ]のような過程をたどったらしい。日母を齒音の類とするのはそのためである。これも非鼻音化のひとつであるが、日本漢字音はその変化をよく反映していて、呉音でナ行、漢音でザ行となる。来母、日母ともに「清濁」である。

<表11>

	中古音	北京音	呉音	漢音
清濁来母	[ l ]	[ l ](ヒソソ l)	ラ行	ラ行
清濁日母	[ ɲ ]	[ ʒ ](r)	ナ行	ザ行

### § 46 練習

1. 空欄を埋める。

- a.「老」( 母) 北京音「lao 3 [ ]」 呉音「 ( )」 = 漢音「 ( )」  
 b.「然」( 母) 北京音「ran 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」  
 c.「如」( 母) 北京音「ru 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」  
 d.「人」( 母) 北京音「ren 2 [ ]」 呉音「 」 漢音「 」

2. 呉音と漢音で読んでみよう。

「老若男女」 「自然」

### § 47 声母のまとめ

<表12>

	半齒	半舌	喉 音				齒 音				牙 音				舌 音				唇 音				
	清濁	清濁	清濁	濁	清	清	濁	清	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清	清濁	濁	次清	清
一等	×	来	×	匣	曉	影	×	心	從	清	精	疑	×	溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫
二等	×	来	×	匣	曉	影	禪 <sub>2</sub>	審 <sub>2</sub>	牀 <sub>2</sub>	穿 <sub>2</sub>	照 <sub>2</sub>	疑	×	溪	見	娘	澄	徹	知	明	並	滂	幫
三等	日	来	喻 <sub>3</sub>	×	曉	影	禪 <sub>3</sub>	審 <sub>3</sub>	牀 <sub>3</sub>	穿 <sub>3</sub>	照 <sub>3</sub>	疑	群	溪	見	娘	澄	徹	知	明/微	並/奉	滂/敷	幫/非
四等	×	来	喻 <sub>4</sub>	匣	曉	影	邪	心	從	清	精	疑	群	溪	見	泥	定	透	端	明	並	滂	幫

<表13> 前期中古音の音価

一等		l		ɦ	h	ʔ		s	dz	ts'	ts	ŋ		k'	k	n	d	t'	t	m	b	p'	p
二等		l		ɦ	h	ʔ	ʒ	ʃ	dz	tʃ'	tʃ	ŋ		k'	k	n	d	t'	t	m	b	p'	p
三等	ɲ	l	ɦ		h		z	ɕ	dz	tɕ'	tɕ	ŋ	g	k'	k	n	d	t'	t	m	b	p'	p
四等		l	j	ɦ	h	ʔ	z	s	dz	ts'	ts	ŋ	g	k'	k	n	d	t'	t	m	b	p'	p

### § 48 等位と拗介音

ここで拗介音というのは -i- 介音の事である。拗介音を持たない音節を直音という。現代北京音では拗介音

は一種類しかないが、中古音では [-ɪ] と [-i] の二種類があった事が知られている。[-ɪ] は [-i] よりもやや緩んだ中舌的な音である。「イ」と「エ」の間だと考えればよい。

『韻鏡』では [-ɪ] を持つ音節を三等欄に、[-i] を持つ音節を四等欄に配置している。一等と二等は直音である。ただし、これはあくまでも『韻鏡』の時代の音韻体系(すなわち後期中古音)であって、『切韻』の時代の体系(前期中古音)では状況はやや異なっていた。拗介音の問題は中古音の中でも最も複雑な部分なので、説明に入る前に次の点を確認しておいてほしい。

(一等韻と二等韻は前期中古音、後期中古音ともに直音である。)  
 (したがって、拗介音の問題に関わるのは三等韻と四等韻だけ。)

まずは比較的簡単な四等韻から説明しよう。四等韻とは『韻鏡』で四等欄のみに配置される韻だという事は既に述べたとおりだが、実は四等韻は前期中古音においては直音であった。つまり、前期中古音では三等韻のみが拗音で、他の一等韻、二等韻、四等韻はすべて直音だったのである。ところが唐代の中期までに四等韻の拗音化が起こって [-i] 介音を生じ、三等韻の一部と合流してしまった。『韻鏡』においてはその [-i] 介音の故に四等欄に配置されているわけである。

次に三等韻。三等韻は非常に複雑で、その全てを説明するとかえって混乱する恐れがあるので、歯音の場合についてだけ詳しく述べて、他は対照表によって類推してもらう事にしよう。歯音の場合、三等韻は『韻鏡』の二等、三等、四等に配置されうる。そのうち二等欄に置かれる音節は前期中古音では [-ɪ] 介音を持っていたが、後期中古音では介音が脱落して直音になった。直音になったからこそ『韻鏡』では二等欄に配置しているわけである。また、三等欄に置かれる音節は前期中古音では[-i] 介音を持っていたが、後期中古音では声母の変化の影響で [-ɪ] 介音へと変わった。それ故『韻鏡』では三等欄に配置される。最後に、四等欄に置かれる音節は前期中古音でも後期中古音でも[-i] 介音で変わらない。したがって、『韻鏡』では四等韻と同様に四等欄に配置される。

以上の事柄を具体的な音価とともに示すと、以下のようになる。

<表14>	例字	前期中古音	後期中古音	『韻鏡』の配置
二等韻黠韻 審2母	「殺」	[ʂat]	[ʂat]	二等欄 <sup>23</sup> 転入声
三等韻薛韻 審2母	「穢」	[ʂiet]	[ʂat]	(二等欄)「殺」とダブるので登録されていない
三等韻薛韻 審3母	「設」	[ɕiet]	[ʂiet]	三等欄 <sup>23</sup> 転入声
三等韻薛韻 心母	「薛」	[siet]	[siet]	四等欄 <sup>21</sup> 転入声
四等韻屑韻 心母	「屑」	[set]	[siet]	四等欄 <sup>23</sup> 転入声

少々複雑だが、歯音に関して納得できれば、他も難しくはない。前期中古音と後期中古音の三等韻の介音の変化を『韻鏡』の図式に合わせて対照させておこう。

<表15> 前期中古音における三等韻の介音

	半齒	半舌	喉音	齒音	牙音	舌音	唇音
一等							
二等				ɪ			
三等	i	i	ɪ	i	ɪ	i	ɪ
四等			i	i	i		i

<表16> 後期中古音における三等韻の介音

	半齒	半舌	喉音	齒音	牙音	舌音	唇音
一等							
二等				直音化			
三等	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ
四等			i	i	i		i

要するに、唇音、牙音、喉音では前期中古音でも後期中古音でも状況は変わらない。注意が必要なのは舌音と齒音(および半舌音と半齒音)だけである。

これら二種の拗介音の差異は、漢語諸方言では閩ピン方言のごく一部を除いてほとんど反映されない。しかし、日本、朝鮮、ベトナムの漢字音には反映する部分があり、無視するわけにはいかないのである。(例えば、呉音で真韻見母三等「巾」が「コン」、軫韻(=真韻の上声)見母四等「緊」が「キン」)

§ 49 十六撰ジュウロクセツ

中古音の韻母はかなり複雑なので、いきなりそれぞれの韻の韻母にアプローチするのは少し無理がある。そこで普通は中古音の韻(および韻母)を16個の「撰」というグループに分けて考えることにしている。「撰」とは、互いに似かよったいくつかの韻をひとまとめにした単位である。それらの「撰」には、例によって代表字でそれぞれ名前が付けられている。「通撰」「江撰」のごとくである。「韻母の音価表」( § 53)を見ると、一番左にこの十六撰が示されているので、どの撰がどの韻を含むかについてはそれを参照するとよい。ここでは十六撰の主な特徴だけを表にしてまとめておこう。

<表17>

	ゼロ韻尾	- i	- u	- m	- n	- ŋ	- uŋ
/ a / 系	果・仮	蟹カイ	効	咸カン	山	宕・梗	江
/ ə / 系	遇	止	流	深	臻シン	曾ソウ	通

果撰カセツと仮撰カセツは非常に近い関係にあるので、まとめて果仮撰カカセツと呼ぶことが多い。宕撰トウセツと梗撰コウセツも同様である。さて、上に揚げた /a/ 系と /ə/ 系というのはすこぶる大ざっぱなとらえ方であるが、このように主母音の種類によって二系列に分けると、十六撰はスッキリしたものになる。/a/ 系は日本漢字音でおおむね「ア」「エ」、/ə/ 系はおおむね「イ」「ウ」「オ」の母音で読まれる。『韻鏡』では /a/ 系が「外転」、/ə/ 系が「内転」と表示されることが多いので、それぞれ「外転系」「内転系」とも称される。なお、「～撰」という時には、平上去入の声調をすべて含む。

§ 50 練習

1. 「韻母の音価表」( § 53)を参照しながら、次頁の広韻韻目表の各韻を十六撰に分ける。
2. 以下の字がそれぞれ何撰に属するか推測してみる。
  - 「左」(ヒト:漢音の読みが仮名一文字の場合はゼロ韻尾。)
  - 「右」(ヒト:「ウ」は呉音だから、漢音で考える。)
  - 「老」(ヒト:旧仮名は「ロウ」か「ラウ」か? 北京音を参照せよ。)
  - 「米」
  - 「反」(ヒト:韻尾は -m か -n か。「反応」という熟語を参照せよ。「ハン」+「オウ」がどうして「ハンノウ」なのか?)
  - 「陰」(ヒト:「陰陽」という熟語は漢音では「インヨウ」だが、呉音ではなんと「オンヨウ」と読む。韻尾は?)

§ 51 外転系(/a/系)の韻の配置

外転系の韻は /a/ 系の主母音を持つが、/a/ 系の母音にはかなり多くのバリエーションがある。山撰を例にとると、前期中古音では [ɑ][a][ɐ][ɛ][ʌ][e] の6種があり、後期中古音ではだいぶ減って [ɑ][a][e] の3種である。前期と後期で主母音の数が異なるのは、一つには重韻ジュウインの合流が起こったからである。重韻とは同じ撰の同じ等位の中に二つの韻があることを言う。山撰の場合、二等に「刪韻サンイン」と「山韻サンイン」があり、三等に「仙韻センイン」と「元韻ゲンイン」がある。これらの重韻は後期中古音では全くの同音になった。また、四等韻が拗音化して三等韻の一部と合流したことも主母音の数が減る原因となっている。山撰は『韻鏡』では第21転から第24転までを占めているが、いま合口(-u-介音を含む音節)の韻を配置した第22転と第24転を考慮の外に置いて、開口の韻(-u-介音を含まない韻)を配置した第21転と第23転について、音価を示してみよう。(三等韻の拗介音は前期中古音では声母によって異なるが、以下には牙音の場合をあげる。)

<表18>

	第21転	前期中古音	後期中古音	第23転	前期中古音	後期中古音
一等韻	ナシ			寒韻	[-an]	[-an]
二等韻	山韻	[-ɐn]	[-an]	刪韻	[-an]	[-an]
三等韻	元韻	[-iɛn]	[-ien]	仙韻	[-ien]	[-ien]
三等韻	仙韻	[-ien]	[-ien]	先韻	[-en]	[-ien]

第23転のように一等韻から四等韻までそろっているのが、外転系の韻の標準的な配置である。ほかにも第

13轉(蟹攝)、第14轉(蟹撮合口)、第24轉(山撮合口)、第25轉(効攝)、第39轉(咸攝)などはそのような標準的な配置を示す。

『広韻』韻目表(平山久雄「中古漢語の音韻」より)

〈平声〉	〈上声〉	〈去声〉	〈入声〉
1東独	1董独	1送独	1屋独
2冬鍾		2宋用	2沃燭
3鍾	2腫独	3用	3燭
4江独	3講独	4絳独	4覺独
5支脂之	4紙旨止	5寘至志	
6脂	5旨	6至	
7之	6止	7志	
8微独	7尾独	8未独	
9魚独	8語独	9御独	
10虞模	9麌姥	10遇暮	
11模	10姥	11暮	
12齊独	11霽独	12霽祭	
		13祭	
		14泰独	
13佳皆	12蟹駭	15卦怪夬	
14皆	13駭	16怪	
		17夬	
15灰咍	14賄海	18隊代	
16咍	15海	19代	3蕭宵
		20廢独	29篠小
17眞諄臻	16軫準	21震稕	34嘯笑
↑	↑	↑	
18諄	17準	22稕	4宵
19臻			5肴独
20文欣	18吻隱	23問独	6豪独
21欣(殷)	19隱	24焮独	7歌戈
22元魂痕	20阮混很	25願懇恨	↑
23魂	21混	26懇	8戈
24痕	22很	27恨	9麻独
25寒桓	23旱緩	28翰換	10陽唐
↑	↑	↑	11唐
26桓	24緩	29換	12庚耕清
27刪山	25潸產	30諫緘	13耕
28山	26產	31禫	14清
1先仙	27銜黠	32霰線	15青独
2仙	28黠	33線	16蒸登
			17登
			18尤侯幽
			19侯
			20幽
			21侵独
			22覃談
			23談
			24鹽添
			25添
			26咸銜
			27銜
			28嚴凡
			29凡
			30小
			31巧独
			32皓独
			33哿果
			↑
			34果
			35馬独
			36養蕩
			37蕩
			38梗耿靜
			39耿
			40靜
			41迥独
			42拯等
			43等
			44有厚黠
			45厚
			46黠
			47寢独
			48感敢
			49敢
			50琰忝儼
			51忝
			53嫌檻范
			54檻
			52儼
			↓
			55范
			60梵
			35笑
			36效独
			37号独
			38箇過
			↑
			39過
			40禡独
			41漾宕
			42宕
			43映(敬)靜勁
			20陌麥咍
			21麥
			22昔
			23錫独
			24職德
			25德
			49有候効
			50候
			51効
			52沁独
			26緝独
			27合盍
			28盍
			29葉帖
			30帖
			31洽狎
			32狎
			33業乏
			34乏

§ 52 内転系 (ə/系) の韻の配置

内転系の韻の主母音は狭くて弱いのが特徴である。したがって、介音や韻尾の影響を受けやすく、特に拗音音節ではかなりゼロ母音に近づく。再構音価としては、直音の場合には [ə]、拗音の場合には [ə̃] [ě̃] (母音の上のくぼみの記号は、母音が短いことを表わす) で示されることが多い。

外転系では一等韻から四等韻までそろっているのが標準的な配置であったが、内転系の韻では一等韻と三等韻しか存在しない。直音ならば一等韻、拗音ならば三等韻である。簡単な表にしてみよう。

<表19> 一等韻 二等韻 三等韻 四等韻

外転系			
内転系		×	×

ただし、内転系に二等韻と四等韻がないからといって、二等欄と四等欄にまったく字が記されないわけではない。これまでに述べたように、三等韻では二等欄や四等欄に字が記される事がある。例えば、第42転(曾撰)には内転系の典型的な配置が見られ、一等韻と三等韻が収められているが、とりわけ入声職韻では二等欄と四等欄に多数の字が記されている。

§ 53 韻母の音価表

現在、前期中古音の再構音価として最もよく用いられている平山久雄氏の音価表(大修館1967『中国文化叢書1 言語』の中の「中古漢語の音韻」に示されたもの)を掲げる。声母については§ 47を見よ。以下の表において、( )内はカールグレンの推定音価。

等	1 等	2 等	3 等	4 等	転開・次合
通	東 ðuŋ (uŋ)		東 iǎuŋ (jiuŋ)		1 開
	冬 oŋ (uoŋ)		鍾 ioŋ (jiwoŋ)		2 開合
江		江 auŋ (ɔŋ)			3 開合
止			支 iě(jiě)	支 iě	4 開合
			支 yě(jwiě)	支 yě	5 合
			脂 i(ji)	脂 i	6 開
			脂 yi(jwi)	脂 yi	7 合
			之 iǎi(ji)		8 開
			微 iǎi(jěi)		9 開
			微 yǎi(jwěi)		10 合
遇			魚 iə(jiwo)		11 開
	模 o(uo)		虞 yu(jiu)		12 開合
蟹	哈 ai(qi)	皆 vi(ai)	祭 iei(jiei)	齊 ei(iei)	13 開
		夬 ai( ) <sup>13 転入声調に寄入</sup>			
	灰 uai(uqi)	皆 uvi(wai)	祭 yei(jiwei)	齊 uei(iwei)	14 合
		夬 uai(wai) <sup>14 転入声調に寄入</sup>			
	泰 ai(ai)	佳 ai(ai)		祭 iei	15 開
	泰 uai(wai)	佳 uai(wai)		祭 yei	16 合
			廢 iai( ) <sup>第 9,10 転入声調に寄入</sup>	9 開	
			廢 yai(jiwei)	10 合	

臻	痕 ən (ən)		臻真 iĕn (jiĕn)	真 iĕn	17開
	魂 uən (uən)		真 yĕn	諄 yĕn (ji <sup>w</sup> ĕn)	18合
			欣 iĕn (jiĕn)		19開
			文 yĕn (jiuən)		20合
山		山 ɐn (an)	元 ian (jiĕn)	仙 ien	21開
		山 uən (ʷan)	元 yan (ji <sup>w</sup> ĕn)	仙 yen	22合
	寒 an (an)	刪 an (an)	仙 ien (jiĕn)	先 en (ien)	23開
	桓 uan (uan)	刪 uan (ʷan)	仙 yen (ji <sup>w</sup> ĕn)	先 uen (i <sup>w</sup> en)	24合
效	豪 au (au)	肴 au (au)	宵 ieu (jiĕu)	蕭 eu (ieu)	25開
				宵 ieu	26合
果	歌 a (a)				27合
	戈 ua (ua)		戈 ya		28合
仮		麻 a (a)	麻 ia (jĭa)		29開
		麻 ua (ʷa)			30合
宕	唐 aŋ (aŋ)		陽 iaŋ (jiĭaŋ)		31開
	唐 uaŋ (ʷaŋ)		陽 yaŋ (ji <sup>w</sup> aŋ)		32合
梗		庚 aŋ (eŋ)	庚 iaŋ (jiĕŋ)	清 ieŋ (jiĕŋ)	33開
		庚 uaŋ (ʷeŋ)	庚 yaŋ (ji <sup>w</sup> eŋ)	清 yeŋ (ji <sup>w</sup> eŋ)	34合
		耕 eŋ (æŋ)		青 eŋ (ieŋ)	35開
		耕 ueŋ (ʷæŋ)		青 ueŋ (i <sup>w</sup> eŋ)	36合
流	侯 əu (əu)		尤 iəu (jiĕu) <small>幽韻母音4等は重紐B類に属する</small>	幽 iəu 幽 iəu	37開
深			侵 iĕm (jiĕm)	侵 iĕm	38合
咸	覃 am (am)	咸 ɐm (am)	鹽 iem (jiĕm)	添 em (iem)	39開
	談 am (am)	銜 am (am)	嚴 iam (jiĕm)	鹽 iem	40合
			凡 iam (ji <sup>w</sup> em)		41合
曾	登 əŋ (əŋ)		蒸 iəŋ (jiĕŋ)		42開
	登 uaŋ (ʷəŋ)		[職 yək (ji <sup>w</sup> ək)]		43合

## § 54 練習(16)

以下の字の中古音を調べる。例にならって、音類の分析的表示と再構音価とで示す事。

(例)「金」: 深摂平声侵韻見母三等 [kiēm]<sup>平</sup>

まずは『広韻』の索引で所属韻を調べ、『韻鏡』における位置を確認する。あとは § 47 と § 53 の音価表と対照させればよい。

- a. 「今」
- b. 「古」
- c. 「交」
- d. 「橋」
- e. 「顔」
- f. 「岸」
- g. 「言」
- h. 「語」
- i. 「郎」
- j. 「落」
- k. 「剛」
- l. 「各」
- m. 「光」
- n. 「郭」
- o. 「急」
- p. 「立」

この練習が何とかできるようなら、音韻学の入門段階は突破したといってよい。今後の方向としては、中古音の音価推定の方法を詳しく追究したり、近世音や上古音にアプローチして、研究範囲を広げてゆくことになる。最後に簡単な文献案内を記したので、参照されたし。

## 5. 参考文献

まず、中古音の概説として、すでに何度か紹介した『中国文化叢書1 言語』(大修館1967)の中の平山久雄氏の「中古漢語の音韻」がある。この「中古漢語の音韻」に述べられている事柄が理解できれば、音韻学の基礎は身に付いていると言える。また、音韻学全般にかかわるものとしては李思敬著、慶谷寿信・佐藤進編訳『音韻のはなし - 中国音韻学の基本知識』(光生館1987)がある。多少風変わりな本だが、詳細な訳注が有用である。

以下、各節に関連する文献を紹介する。

[ § 1 ] [注] でふれた各時代の資料のうち、チベット文字資料については、高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究』(創文社1988)がある。他の資料については網羅的な研究はまだない。

[ § 6 ] 沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂1986)  
河野六郎「朝鮮漢字音の研究」(『河野六郎著作集2』所収。平凡社1979)  
三根谷徹「越南漢字音の研究」(『中古漢語と越南漢字音』所収。汲古書院1993)  
詹伯慧著、樋口靖訳『現代漢語方言』(光生館1983)

- [ § 7] ヨーロッパの比較言語学については、  
 W.B.ロックウッド著、水野芳郎訳『比較言語学入門』(大修館1976)  
 カールグレンの経歴や業績等については、  
 遠藤光暁「カールグレンの生涯と学問」(『中国語』94年8月号～10月号。内山書店)
- [ § 9] 『切韻』の基礎となる方言については、  
 有坂秀世「隋代の支那方言」(『国語音韻史の研究』所収。三省堂1957)
- [ § 10] 馬淵和夫『五十音図の話』(大修館1993)
- [ § 24] 遠藤光暁「三つの内外転」(『日本中国学会報』40。1988)
- [ § 36] 非鼻音化については、  
 水谷真成「唐代における中国語語頭鼻音 Denasalization の進行過程」(『中国語史研究』  
 所収。三省堂1994)  
 有坂秀世「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」(『国語音韻史の研究』所収。三省堂  
 1957)
- [ § 48] 有坂秀世「カールグレン氏の拗音説を評す」(『国語音韻史の研究』所収。三省堂1957)
- [ § 49] 江撰と通撰の韻尾を -uŋ とする事については、  
 三根谷徹「中古漢語の韻母の体系」(『中古漢語と越南漢字音』所収。汲古書院1993)

さらに詳しい文献を知りたいければ、上に紹介した『音韻のはなし』の訳注を熟読のこと。